

神谷の魅力発信による絆結び

—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—

高橋ゼミナール

| | | | | |
|----|--------|------|--------|-------|
| 4年 | 09M002 | 畔上早樹 | 09M004 | 五十嵐秀也 |
| | 09M027 | 斉藤美如 | 09M028 | 坂口智大 |
| | 09M048 | 土橋里美 | 09M049 | 鳥部健斗 |
| | 09M051 | 南雲颯滋 | 09M058 | 丸山諒 |
| | 09M061 | 山口祐貴 | | |
| 3年 | 10M004 | 阿部亮太 | 10M008 | 上野晋矢 |
| | 10M010 | 大口昌之 | 10M041 | 高橋達郎 |
| | 10M052 | 早川祐也 | | |

目 次

- 1 はじめに
 1. 1 取り組みの趣旨
 1. 2 活動概要

- 2 行事への参加
 2. 1 活動テーマ設定と行事への参加
 2. 2 行事への参加を通じて見えたこと

- 3 第1班の活動内容
 3. 1 神谷地区の結束に良さと酒宴の関わり
 3. 2 新潟県におけるチューリップの先駆者・水島義郎氏の功績
 3. 2. 1 チューリップに纏わる文献調査
 3. 2. 2 人物の経歴
 3. 2. 3 新潟県におけるチューリップ略歴
 3. 2. 4 調査のまとめ

- 4 第2班の活動内容
 4. 1 ほうきづくり
 4. 1. 1 ほうきづくりに至るまでの経緯
 4. 1. 2 神谷創作趣味の会とほうきづくりについて
 4. 1. 3 神谷創作趣味の会の永井さんとの打ち合わせ
 4. 1. 4 ほうきづくり教室スケジュール決定と参加者募集活動
 4. 1. 5 モノづくり教室
 4. 1. 6 活動の成果と反省
 4. 2 チューリップ植栽
 4. 2. 1 チューリップ植栽に至るまでの経緯
 4. 2. 2 花壇づくり
 4. 2. 3 球根植栽
 4. 2. 4 看板づくり
 4. 2. 5 2班の活動を振り返って

- 5 第3班の活動内容
 5. 1 冊子作り その他
 5. 1. 1 冊子作りの目的・概要
 5. 1. 2 冊子作りの経緯
 5. 1. 3 冊子企画案
 5. 1. 4 冊子の各項目について

- 5. 1. 5 冊子の完成
- 5. 1. 6 冊子の配布
- 5. 1. 7 他の活動への参加・取材
- 5. 1. 8 活動から学んだこと
- 5. 1. 9 反省点及び改善

6 全体のまとめ

- 6. 1 結果
- 6. 2 活動を行った上での反省
- 6. 3 社会人基礎力について
- 6. 4 感謝のメッセージ

引用・参考文献

謝辞

1 はじめに

1. 1 取り組みの趣旨

近年、少子高齢化や核家族化、若者の田舎離れなどの影響で、農山村地域が活気を失いつつある。そのような中で、自分たちの歴史や文化を守り、伝統を次の世代に伝えていくために、住民自らが立ち上がり地域の活性化に取り組んでいる地域が増えている。

私たち「高橋ゼミナール」は、住民による地域活性化のための企画・立案・実行を「地域活性化プロジェクト」の活動の中で立ち上げ、平成21年度から活動を行っている。具体的には、県や市などの地方自治体や国が何とかしてくれるのを待っているのではなく、「自分たちの地域は自分たちで守っていくのだ」という思いを一つにして、地域の活性化に取り組んでいる長岡市神谷地区（旧越路町神谷地区）をモデルとし、地域に残された文化や歴史などの資産を守りながら地域の活性化を図る方策について取り組んできている。

昨年度は、「地域の資産を生かした絆づくりー地域の魅力再発見ー」という趣旨で、神谷の文化や歴史を新しく神谷に移り住んだ人たちや神谷の子供たちから知ってもらう方策を考えるとということで、「神谷情報マップ」作成活動を行った。

今年度は、昨年度の成果の上にたち、神谷の魅力に関わる史実を明らかにするとともに、それらの魅力から新たな魅力を引き出し、他地域へアピールするとともに絆を結ぶことを目指した「地域の魅力発信による絆結び」活動を行ってきた。

1. 2 活動概要

高橋ゼミナールは、2009年以来、「地域の資産を生かした地域活性化」をテーマに、長岡市旧越路町にある神谷地区の地域活性化について取り組んできた。今年度は、どのような活動を行うかで意見が分かれたため、誰がどの情報を所有しているかを明確にし、かつゼミの各メンバーが取り組むテーマを明確にすることにより作業効率を高めることができるのではないかと考え、各テーマに沿った3つのグループに分かれて、活動を行った。

設定したテーマは、次の3つとした。

- ①「神谷の詳しい魅力研究」
- ②「神谷の魅力を創り引き出す」
- ③「神谷の魅力を他の場所へアピール」

第1班は「神谷の詳しい魅力研究」を担当し、神谷地区にまつわる無形資産の文献調査やヒアリング調査を行い、その内容をまとめた。第2班は「神谷の魅力を創り引き出す」を担当し、主に新しい企画や神谷が新潟県におけるチューリップの最初の開花地であることをアピールするためにチューリップの植栽と看板作りを行い、神谷地域を盛り上げる活動を行った。第3班は「神谷の魅力を他の場所へアピール」を担当し、コミュニケーションツールの作成や第1班と第2班の活動内容をまとめた小冊子を作成、配布することにより、神谷の知名度向上を図る活動を行った。

その他、神谷地区で開催される各種の行事に積極的に参加した。神谷の方々との交流を深め中で「神谷の魅力とは何か」を発見するとともに数多くの行事に参加することで、交流をただ単にゼミナール活動の一環として終らせるのではなく、その枠を超えた親睦と友好関係を築きたいと考えた。

2 行事への参加

2. 1 活動テーマ設定と行事への参加

ゼミでは、ゼミのメンバー全員が神谷の行事に参加することを申し合わせ、新しい体験や交流をさせて頂いた。その結果、ゼミ生みんなが、多くの神谷住民と交流を交わす中で親睦を深め、神谷の方々とより良い関係を築くことができた。

- ① 5月「どろんこ田植え」(5月13日)
- ② 6月「運動会」(6月10日)
- ③ 8月「秋季大祭」(8月25・26日)
- ④ 9月「どろんこ田稲刈り」(9月16日)
- ⑤ 10月「収穫祭」(10月28日)

(1) どろんこ田植え

神谷で毎年5月に行われる「どろんこ田植え」に我々も参加させていた。当日は午前9時頃から田植えの作業が開始されたが、小学生とその親御さんが中心となって多くの方が参加していた。「どろんこ田植え」は昔ながらのやり方で、機械を使わず苗を一本一本手で植えていくものであった。子供たちは何のためらいもなく、楽しそうにしながらもくもくと田植えを行っていたが、我々は少しためらいながら田んぼの中に足を運んだ。泥のなんともいえない感触に少し身震いしながらも、体勢を整えつつゆっくりと苗を植えていく。ゴロという道具を使って予め記された十文字印の所に苗を植えていたはずがいつの間にかズレてしまい、気づいた時には歪んだ並び方をしている苗を見て驚いた。5月の田んぼの中はまだ冷え切っており、水の冷たさで足が少しかじかみながらも泥の中で慣らしていった。田植えという作業で服が汚れないはずはなく、作業を終えるころには飛び散った泥が至る所に付着していた。来年度、参加する際には着替えの服を用意していたほうがよいと思った。



図表2-1
苗を植えてるところ



図表2-2
畔道に沿って横一列に並び作業を行う

(2) 運動会

6月に行われた運動会は、あいにくの雨であった。そのため、当初予定されていた神谷遊園地ではなく、越路小学校の体育館を借りて行われた。当日は大勢の人が参加されており、運動会を行うには少々スペースが狭めに感じられる程であった。ゼミのメンバーは、高橋先生も含めてほとんどの競技に参加した。「玉入れ」は年齢を限定せず、子供からお年寄りまで様々な世代の方を混ぜて行う種目で、競争性もなく楽しみながら参加することができる競技であった。我々は、メンバーの数が揃わないチームから何度も呼ばれ、その都度「玉入れ」を楽しんだ。この運動会では、コースの中央に置かれた瓶ビールを早飲みする「ビール早飲み」という種目があったが、これなどは神谷特有の競技ではないかと思った。最後にはフラフラになりながらもゴールする人や、中には乾杯を挙げてしまう組まであり、この競技が楽しみで運動会に参加する人も多いのではないかと思った。子供たちには、「パン食い競争」が人気であった。我々はこの競技でパンを吊るす役を担い、強く引っ張らないとたるんでしまう紐に少々苦戦した。最後の「バトンリレー」は、ここ一番の盛り上がりがあった。競技が終わった後、参加者全員に豚汁が振る舞われ、私達もご馳走になった。皆わきあいあいとした雰囲気、地域の団結力が感じられる行事だった。



図表 2 - 3

運動会「パン食い競争」の手伝い

(3) 秋季大祭

毎年8月の下旬に神谷で2日間に渡っておこなわれている秋季大会に今年は高橋ゼミとして初めて参加させてもらった。以前、私達が神谷を訪れた際に、今年は高橋ゼミナールからも秋祭りの演芸大会かカラオケ大会で何か出し物をしてほしいと声がかかっていた。何をやるかをゼミの中で議論するが、初めの内は実際に披露できそうもない案に議論が走りがちであった。議論を進める中で、ゼミ生の中から、以前にも踊った経験がある「よさこいソーラン節」をしないかとの意見が出た。神谷では、今までに「よさこいソーラン節」

は披露されたことが無く、また壇上で披露するのに適した出し物だろうということから、私達は、演芸大会で「よさこいソーラン節」を踊ることに決めた。しかし、事前に互いのスケジュールを把握しなかった等から、実際に練習できたのは数回で、祭り当日までに踊りを完成することができなかった。

今年の「演芸カラオケ大会」には、神谷地区の子供会や隣組等の約13のチームが参加し、ダンスや劇がステージで披露された。各チームの出し物には、今年2012年がロンドンオリンピックの年であったことから、それにちなんだ劇や、AKB48の「ヘビーローテーション」、ゴールデンボンバーの「女々しくて」等が様々なものがあった。各チームの個性的な演技は、神谷の皆さんを魅了し、会場を沸かせていた。私達高橋ゼミナールの出番は、13チーム中の13番で、一番最後であった。演目は「南中ソーラン節」とした。当日のステージに立ったゼミ生5人は、はじめに自己紹介をした後、踊りを披露した。一番最後のステージとあって、神谷の皆さんの期待は膨らんでいた。しかし、本番になっても、振り付けを完全に覚えてきたという人はなく、それに加え、ソーラン節の音楽が途中から再生されてしまったというハプニングまで発生したことから、各自のダンスがバラバラになってしまい、とても酷い踊りを観客に見せてしまった。そんな私達の踊りは、見ている方に不快感を与えてしまったのではないかと思うが、神谷の方々から最後は盛大な拍手をしてもらった。

その後、表彰式が行われ、皆とても緊張した様子で発表を待っていた。一番初めに「頑張ったで賞」の表彰が行われた。私達は何となく、受賞者は自分達ではないかと予感していたが、その予感は見事の中し、その賞に選ばれたのは「長岡大学」だった。練習不足で、とても見せられないような踊りをしてしまった私達は、喜ぶべきなのか、何とも言えない気持ちでした。観客の皆様には申し訳ないと思いつつ、来年、再チャレンジする機会があるのなら今度こそ成功させたいと思った。

私達は、秋季大祭の演芸大会に出させていただいたことで、神谷の方々との親交を少しでも深めることができたのではないかと感じた。



図表 2 - 4
高橋ゼミによる「ソーラン節」披露



図表 2 - 5
演芸大会表彰式で表彰される様子

(4) どろんこ田稲刈り

「どろんこ田稲刈り」は5月に行った「どろんこ田田植え」で植えた稲を収穫する催しである。この稲刈りにもゼミ生数人が参加させて頂いた。当日は天候に恵まれ、子供達から大人（高齢な方）まで多くの方が参加され、皆汗を流しながら、黄金色に実った稲を張り切って刈った。中には稲刈りは初めてだというゼミ生もいて、農家の方から刈り方の指導を受けました。稲刈りが終わった後の「はざかけ」（刈った稲を天日干しする作業）は、大人の方が行ったが、その間、子供達は疲れた様子で休憩していました。

稲刈りから「はざかけ」までの作業が終わった後、公民館で慰労会が行われた。大人の方は「待ってました！」と言わんばかりに、お酒を飲みながらさまざまな話を聞かせてくださった。



図表 2 - 6
稲刈りの指導



図表 2 - 7
稲刈り終了後の集合写真

(5) 収穫祭

収穫祭は、今年の収穫を祝うと共に住民の交流と絆を深め、さらには平成16年10月に起きた中越大震災を忘れないようにするために、地震の翌年から毎年行われている行事である。当日は、10時頃から参加させていただいたが、雨天だったために、会場の神谷公民館前にはテントと屋根代わりのブルーシートが張られていた。この日は、「旧神谷信用組合」の名称を決める選挙もあわせて行われ、多くの方が投票されていた。その集計作業を私達も手伝った。投票の結果、名称は「^{しんゆうかん}神友館」に決定した。

お昼頃から餅つきが行われ、ついたばかりの餅を使ったお雑煮が皆に振る舞われた。ついた餅は神谷の方々と私達が汗を流しながら「どろんこ田」から収穫した「もち米」であり、とても美味しく感じた。収穫祭は子供からお年寄りまで大勢参加され、とても賑わっていた。



図表 2 - 8
神谷公民館正面



図表 2 - 9
餅つきの準備

私達は、神谷の「元気の源」ともいえるのではないかとと思われる各種の行事に参加してきたが、そのことを通して、神谷の地域性や魅力とは何かが少しずつ見えてきた。

神谷の魅力の一つに、行事や会合への住民の参加の多さがあると考えた。また、神谷の行事では、終わった後に慰労会と称する飲み会をすることが多いが、それは、神谷の方の多くがお酒に強いという事もあるかもしれないが、住民同士のコミュニケーションを楽しみたいという気持ちが強いからではないかと考える。私達は、これを“飲コミュニケーション”という言葉に置き換えているが、神谷は“飲コミュニケーション”を楽しみにしている方が多いため、必然的に行事への参加率も高くなるのではないかと考える。但し、飲み会に参加するのは、一般的に男性や高齢な方がほとんどで、30代から40代の女性の方や子供達は飲み会には参加されていない。その理由として、家庭の事情や仕事の都合もあるが、同年代の女性仲間が参加されない事や、年代の違い等で会話についていけないことがあるのではないかと考える。親子連れで参加できる飲み会の場があっても良いのではないかと感じた。

3 第1班の活動

第1班は、昨年度の神谷マップ作成の際に知り得たことを更に深く掘り下げ、神谷地区の無形資産の調査をおこなった。昨年度の調査内容より、神谷地区の結束の良さと酒宴の関わり、新潟県におけるチューリップの先駆者である水島義郎氏の功績を文献とヒアリングにより調査し、明らかにする活動を行った。

3. 1 結束の良さと酒宴の関わり

神谷の人たちとお酒との関わりを見た時、神谷略史には『以前は、男子の青年を“若い衆”と呼び、三字合併前は宮川にその集りである親友会があり（突切島を含む）、道半には交友会があって、宮川では嘉名右エ門家を、道半では仁平次家をそれぞれの宿としていた。男衆は十五歳になるとこの若衆宿へ酒を持参し、仲間入りする慣習になっていた。』と書かれていた。

上記文章から、男衆仲間入りをする際の儀式として、“酒”が用いられていたことがわかる。酒宴とは、人と人をつなぐものであり、仲間入りのための一種の儀礼的なものを含んでいる。こうした儀式の積み重ねにより、更なる団結力が増し、地区での議論を重ねる回数も増えることに繋がってきたのではないかと考える。こうした地区の集まりを行う毎に“酒”を持ち寄る習慣があったならば、現在の神谷地区での結束の良さや、酒宴を開催する頻度の高さが地区の歴史より引き継がれ、共に受け継がれてきたことが分る。

3. 2 新潟県におけるチューリップの先駆者・水島義郎氏の功績

3. 2・1 活動の目的

春になると様々な場所でチューリップの花を見かけるが、チューリップは新潟の県花である。その花を新潟県で初めて咲かせたのは、神谷の住民であった水島義郎という人物であることから、神谷地区は、新潟県におけるチューリップ発祥の地といえる。そこで、神谷地区とチューリップの関係性を明らかにすることで新たなアピールポイントが見出せるのではないかと考えた。この活動では、県内で初めてチューリップを開花させた水島義郎氏と、チューリップの大量生産体制を確立した小山重氏・小田喜平太氏との関係を明らかにすることを目的とした。これまでの文献調査から、水島義郎氏が中蒲原郡役場に勤めていたことが分かった。そこで、当時の中蒲原郡を合併した新潟市、多くの文献の発行元である新潟県に水島義郎氏に関わる記述のある書類の存在についての問い合わせやヒアリング調査を行った。

3. 2. 2 チューリップに纏わる文献調査

主な調査方法は、①昨年度に引き続き文献調査、②新潟県立植物園へのヒアリング、③自治体への問い合わせ、を用いた。

(1) 文献調査

昨年度に引き続き、新潟県立図書館において「水島義朗」と「チューリップ」の二つをキーワードにした文献調査を行った。さらに、新潟県でチューリップの大量栽培体勢を確立させた「小山重」と「小田喜平太」を新たにキーワードに加え、水島義朗氏と小山重・小山喜平太両氏の間に関係がなかったかを調査した。

キーワードを増やしたことにより、昨年度より多くの文献が発見できた。県史からは水島義朗氏の名前を発見でき、明治後期に新潟懸農會より発行された「新潟懸園藝要鑑」に水島義郎氏とチューリップについての記述があることから、水島義郎氏が神谷地区で咲かせたチューリップが新潟県で始めて咲いたチューリップである可能性が高いことを改めて確認できた。事実、多くの先行研究には、この資料が参照されている。

(2) 新潟県立植物園へのヒアリング

新潟県立植物園へヒアリングを依頼したところ倉重祐二氏にお話を伺うことができた。倉重氏に対する2時間のヒアリングで以下の内容を調査できた。

・新潟県のチューリップに関する研究

チューリップは新潟県の県花である。新潟県は、チューリップの切り花生産量が日本一、球根生産量は二位である。

当然のことながらチューリップに関する先行研究は数多く存在する。

・水島義郎氏について

古い文献から水島義郎氏がチューリップを咲かせたということは知られている。しかしながら、水島義郎氏はチューリップを専門に扱っていた訳ではなかったために、あまり注目はされていなかった。

・水島義郎氏と小山重・小田喜平太両氏の関係

一部資料に「水島は小田喜平太にチューリップの知識を伝えた」とあるが事実かどうかは不明。

小山重・小田喜平太両氏に関する資料には、水島義郎氏との関係についての記述はない。ヒアリングでは、先行研究をもとに小山重・小田喜平太両氏について詳しいお話を聞くことができた。しかし、水島義郎氏については、これまでほとんど注目されたことがないので、新たな発見をすることはできなかった。また、期待していた水島氏と小山・小田両氏の関係についても確認をすることができなかった。しかしながら数多くの文献を紹介して頂き、調査の視点が広がった。

「水島氏をピックアップして研究した人は今までいない。何か発見できれば大きな成果になる。」と声をかけて頂き、この活動への意欲が増した。



図表 3 - 1
植新潟県立植物園



図表 3 - 2
紹介して頂いた資料の一部

(3) 自治体への問い合わせ

新潟県立植物園へのヒアリング結果を踏まえ、多くの資料の発行元である新潟県と当時チューリップ栽培の中心地であった小合村を合併した新潟市に水島義郎氏について問い合わせを行った。その結果、以下のような回答を得た。

・新潟県からの回答

『日頃県のホームページをご利用いただきありがとうございます。
大変遅くなりましたが、お問い合わせのありました水島氏に関する資料について関係課に調査してもらいましたが、水島氏に関する当時の資料等は県では確認できませんでした。なお、水島氏についての記載がある文献の記載箇所を添付ファイルのとおり参考までに送付しますので、よろしく申し上げます。』

・新潟市からの回答

『ご質問いただいた水島義郎氏の件ですが、新潟市役所には残念ながら関連する資料は見つかりませんでした。』

しかし、旧新津市に所在する秋葉区役所に照会したところ、当時の新津市が発行した「新津市史」の中に、以下のような記述がありました。（添付資料参照）

「新潟県でのチューリップの栽培は明治37年（1904年）、三島郡来迎寺村の水島義郎が東京妙華園から球根を導入したことに始まる。（「新潟県園芸要覧」）

（中略）

「大正7年（1917年）当時中蒲原郡農会技術員であった水島は自らのチューリップの知識を小合村の小田喜平太に伝えた。これに興味をもった小田は球根を購入して栽培を試みた。」大正時代に郡役所は廃止されましたが、当時の「農会技術員」というのは、現在の県の「農業改良普及員」にあたるのではないかと思います。

そこで、この文面の中にある「新潟県園芸要覧」について、県の新津農業普及センターに存在を確認してもらったところ、聖籠町にある「新潟県農業総合研究所園芸研究センタ

一」になら、いろいろな資料があり、要鑑もあるのではないかとの回答でした。

よって、同センターであれば、チューリップの研究をしているので、新潟県のチューリップの歴史も詳しいと思われます。』

新潟県からの回答では、新たな情報は得られなかった。新潟市からは水島義郎氏と小田喜平太氏の関係に関する情報を紹介して頂いたが、これは新潟県立植物園の取材において、「本当かどうかわからない」と回答を得たのと同質のものであり、二人の関係を実証できる内容のものではなかった。

3. 2. 3 人物の経歴

水島義郎氏について

水島義郎（1885-1959）

- ・新潟県三島郡来迎寺村道半（現新潟県長岡市神谷）
- ・東京農業大学出身
- ・明治30年代、同地域の大地主であった高橋九郎氏よりチューリップの球根を入手、自宅の花畑で見事に花を咲かせる。
- ・叔父であり、東洋大学創設者の井上円了氏曰く「大隈重信の庭のチューリップより立派」
- ・中蒲原郡役場に勤務（勤務期間は現在調査中）

小山重氏について

小山重(1894-1951)

- ・長野県埴科郡西条村（現長野県長野市松代町）
- ・千葉県立高等園芸学校出身、同校でチューリップの試験栽培を行う
- ・英語が得意だった
- ・高等園芸学校卒業後、長野県高井郡立中野農商学校に教諭として勤務（1917.11.26～1918.7.25）
- ・中蒲原郡役場に勤務(1918.8.10～)
- ・自宅でもチューリップを栽培していた

小田喜平太氏について

小田喜平太（1878-1946）

- ・新潟県小須戸村出戸（現新潟県新潟市秋葉区小須戸）
- ・花卉農家
- ・小梅園主
- ・同園にてチューリップを試験栽培（1914年）
- ・日本初の本格的な商業生産に成功

3. 2. 4 新潟県におけるチューリップ略歴

- ・1904年ごろ 水島義郎が高橋九郎よりチューリップの球根を入手
新潟県三島郡来迎寺村道半にて立派に花を咲かせる
(新潟県で初めて咲いたチューリップといわれる)
その後東京妙華園やオランダのクレーラ商会から球根を購入し、
明治末には100品種余を試験栽培した
- ・1911年 新潟県農会編「新潟県園芸要鑑」刊行
水島義郎のチューリップ栽培について紹介される
また、西蒲原郡味方村でもチューリップを試験栽培していたことが記述されている
- ・1914年 小田喜平太が自宅の庭でチューリップを試験栽培
- ・1918年 小田喜平太がチューリップの新品種を導入し試験栽培を始める
小山重が中蒲原に赴任、小田喜平太と出会う
- ・1919年 小田喜平太、チューリップ球根生産を決意、
小山重に依頼し、オランダから数万株の球根を購入、生産拡大を図る
- ・1920年 横浜植木からチューリップ球根を購入するが、ウイルス病の多発で失敗
- ・1921年 小山重・小田喜平太、東洋球根協会圃場を見学
チューリップ栽培の成功を確信
新潟県小合村に園芸組合設立
小合村にチューリップ球根10万球が輸入された
新津町で千葉県立高等園芸学校林脩己講師を招き講演会を開催
- ・1922年 県内のチューリップ球根生産が小合村から中蒲原郡各地に普及
中蒲原郡花卉球根組合設立
県内産の球根が販売され始める
- ・1923年 小田喜平太、東京農産商会を通じ球根15万個を輸入
- ・1924年 中蒲原郡花卉球根組合、同商会を通じオランダから球根14万個を輸入
郡内各地に植栽
- ・1925年 新潟県は初めて全額国補1720円の花弁球根奨励費予算を計上
新潟県球根原種栽培場を小田喜平谷委託
チューリップ代表品種ウイリアムピットを初輸入
小田喜平太、横浜植木株式会社を通じ25万球を輸入
富山県から視察、指導をする
- ・1926年 新潟県農試園芸部でチューリップの試験研究を開始
- ・1927年 新潟県花卉球根協会、サンフランシスコ在住県出身者に5万球を販売委託
しかしながら品質不良で代金回収できず
新潟県花卉球根協会、規格の統一など球根産業の発展を図る
- ・1930年 第2回全国園芸業者大会・全国花卉園芸共進会が
4月27,28日新潟市で開催される
県花卉球根協会は記念誌「越後の花」を刊行

- ・1932年 県内戦前の品種構成がほぼ確定
 小山重、球根事情調査、市場調査のためアメリカ・オランダに出張
 株式会社新潟農園設立
 新潟県花卉球根協会、中国満州でチューリップ展示宣伝会開催
- ・1933年 株式会社新潟農園開園、一般に公開される
 小山重、中国満州へ出張しチューリップなどの宣伝をする
- ・1934年 新潟県副業協会設立、県花卉球根協会に代り球根類を統制等実施
 県球根原種栽培場、小合村から新津町に移転した県農試園芸部に移管設置
- ・1935年 新潟県から米国に球根24万球、中国満州に10万球の輸出に成功
 本格輸出始まるがうまくいかず
 小田喜平太破産
- ・1936年 小合村の田中忠一が温床紙戸でチューリップの促成切り花栽培を試みる
 この前後に新潟農園でも温室でのチューリップ栽培を試みる
- ・1938年 県はチューリップ圃場検査規則を制定し県営検査を実施
 新潟県花卉球根輸出協会設立
- ・1939年 県営検査が強制受験に改められる
- ・1941年 日本から球根750万球（内新潟420万球）輸出準備中7月26日、
 米国の対日資産凍結により中止された
- ・1943年 国の不急作物作付統制令でチューリップの栽培は保存級の栽培に限られる
- ・1946年 小合村でチューリップ130品種の増殖を始める
 小田喜平太死去
- ・1947年 新潟県花卉球根輸出協会設立
- ・1948年 県産球根18万球が戦後初めて米国に輸出
- ・1949年 県に米国から優良品種4種が逆輸入される
 県はチューリップ栽種圃場設置に助成
 県花卉球根輸出協会、米国に30万球の輸出を契約
- ・1950年 県はオランダから新品種を輸入、品種更新を始める
- ・1951年 花卉球根輸出協会、チューリップ球根を皇居に献上、日比谷公園にも寄贈
 株式会社浦浜農園が坂井輪村寺尾の砂丘地に新潟遊園を開設、
 各種チューリップを栽培、市民に開放する
 小山重死去
- ・1952年 県はオランダから新品種を導入、原種圃場設置
- ・1953年 新潟県花卉球根農業協同組合設立登記
 県は国内と輸出の価格差に補てん金を交付し輸出を促進
 新潟市鳥屋野で天然ガス利用のチューリップ促成栽培開始
- ・1954年 球根の新害虫「水仙花虻」臼井村と保内村で確認
 県下のチューリップ栽培は戦前の最盛を超える
 植物友の会、NHK主催の郷土の花に新潟県と富山県でチューリップを選定
 臼井村で全国花卉球根振興大会が開催される

- ・1956年 チューリップ球根腐敗病が激発、県は新潟大学に防除法の確立を委託
県は農業改良資金にチューリップ球根導入事業を創設
- ・1958年 新潟県花卉球根検査条例を施行
新潟県球根腐敗病対策協議会が設立
- ・1959年 5月、新潟市公会堂で第8回日本花卉園芸大会が開催される
新潟市鳥屋野農協にチューリップ球根の暖地球根産地化を試みる
水島義郎死去
- ・1961年 県は「チューリップ耕種基準」に「促成栽培指針」を定め
促成切り花の普及を図る
県のチューリップ球根は県球根農協が出荷し、設立された(社)県花卉球根協会の会員が販売する「一元出荷多元販売」が協定された。
県花卉球根対策協議会がチューリップ球根のトラブル協定機会として発足
- ・1962年 チューリップ球根の選別機が実用化、新潟県や富山県で普及し始める
- ・1963年 県はチューリップを「県の花」に指定
新潟県園試はチューリップ新品種3品種を命名発表
新潟県第1回チューリップ圃場品評会を開催し、豊栄町花卉球根組合が農林大臣賞を受賞する
新潟・埼玉県警は新潟県花卉球根検査条例違反を摘発
- ・1964年 県球根農協は輸入球の増殖事業不振で大幅赤字、その後再建整備に努力
河渡球根組合に初めてチューリップ掘取機、植付機が導入される
- ・1965年 新潟県第1回チューリップまつりが新潟市で開催
県園試から新品種6品種命名発表
- ・1966年 第2回チューリップまつり開催
同まつり事業で「チューリップ音頭」を公募し大月みや子が唄う
県球根農協は事務所を新津市七日町に移転
大量のチューリップ余剰球が発生
- ・1967年 第3回チューリップまつり開催
- ・1968年 第4回チューリップまつり開催
- ・1969年 第5回チューリップまつり開催
- ・1970年 第6回チューリップまつり開催
- ・1971年 第7回チューリップまつり開催
県は五泉市にチューリップ球根センターを設置、優良種球を生産し普及した
水銀剤使用禁止でチューリップ腐敗病が再び大発生、ベンレート防除法確立
- ・1972年 第8回チューリップまつり開催、チューリップまつりはこの年が最後となる
新潟県花卉球根振興協議会が設立
- ・1973年 円が変動相場制に移行し、チューリップ輸出に影響し始める
新潟県で第1回花卉球根振興大会が五泉市で開催
- ・1974年 全国的な豊作により需給バランスが崩れる
新潟県では一部球根の出荷を中止した

- ・1975年 新潟県花卉球根の王経の再建整備は、8カ年かけてこの年完了した
 年新潟県はチューリップの需要低迷打破のため花壇用球根求評宣伝会を
 仙台市で開催
 新潟県にチューリップ球根を加害するオンツツコナジラミ発生
- ・1977年 チューリップ球根センター廃止
 白根市庄瀬農協管内で促成チューリップ切り花生産が始まり、
 生産拡大の端緒となる
- ・1980年 県のチューリップ球根検査数量が過去最大を記録
 白根市でチューリップサビダニの初発生が確認された
- ・1981年 県はチューリップサビダニ防除指針を策定
 臭化メチル薫蒸施設の整備に助成した
- ・1982年 県花卉球根農協は昭和29年3月以降発行してきた「花卉球根情報」を廃刊
 新たに「にいがた花卉球根だより」を発行開始
- ・1986年 県花卉球根検査条例は3月31日で廃止
 県でチューリップ1箱1球抛出運動の益金で「チューリップ花摘大会」を
 豊栄市樋ノ入で開催、首都圏からバスツアー客730名を誘致、
 後に「とよさかチューリップフェア」に発展する
 新潟富山両県と両県花卉球根農協は共同で農林水産省に
 球根隔離制度の存続を陳情
- ・1987年 県はチューリップ花摘みツアーを発展させ、
 うるおい新潟園芸産地宣伝事業で「チューリップフェスティバル」を開催
- ・1988年 農水省は球根類の隔離検疫制度からチューリップ31品種を除外、
 以降漸次拡大、チューリップ球根の輸入自由化が始まる
 球根類の隔離検疫緩和に伴う国内対策として県から国に要望の復興基金創
 設、新品種開発機構の設置は認められず生産振興特別対策事業のみ実施
 女優で染色家の磯村みどりさんが、五泉市でチューリップの花びらを用い
 た
 草木染めを指導した
- ・1989年 県のチューリップ切り花は600万本を超え、埼玉県に次ぎ全国2位となる
 県のチューリップ自主検査数量6300万株で過去最高を記録
- ・1990年 大阪府で開催された「国際花と緑の博覧会」（4月1日～9月30日）に
 新潟・富山両県はチューリップとユリを出店
 県ではチューリップの切り花10万本をつかって新大阪駅で宣伝した
- ・1991年 新潟県のチューリップなど球根生産農家の減少が続いた
 県花卉球根農協は、総事業費2億6千万円で五泉市に
 集出荷冷蔵処理施設を完成した
- ・1992年 チューリップ切り花コンテストが「フラワーウェーブにいがた1992」（新
 潟県、新潟県花と緑推進協議会主催、於新潟市産業振興センター―）併催
 され、14年度も継続開催中である

県は園芸施設化推進緊急対策事業を創設し、農協を事業主体にパイプハウス等を貸付けることにより、チューリップの促成切り花生産も振興された。新潟県のチューリップ切り花出荷数量は埼玉県を抜き、全国1位となる

- ・1994年 新潟県花卉球根農協は球根の出荷コンテナにオランダ式のプラスチック製を採用した
- ・1995年 新潟県花卉球根農協は、五泉市に国の補助を受けてチューリップ冷蔵専門の冷蔵処理施設を増設した
- ・1996年 県は昭和35年以来調査してきたチューリップ生産統計（花卉園芸・特用作物に関する調査）を廃止した
新潟県花卉球根協会が解散した
新潟県のチューリップ球根生産は減少傾向となり、面積、出荷量とも全国1位は富山県となる
- ・1998年 新潟県花卉球根農協は事務所を新潟市七日町から五泉市に移転（チューリップ・鬱金香一歩みと育てた人たち—木村敬助著より抜粋）

3. 2. 5 調査のまとめ

今年度の調査では、昨年度に比べて多くの資料が入手できたことにより、歴史研究の視点や、産業の視点など多くの視点から新潟県のチューリップの歴史についてみる事ができた。

しかし残念なことに水島義郎氏についての新たな発見をすることはできなかった。新潟県には数多くのチューリップに関する先行研究が存在している。ところがその多くは大量生産体制の確立や品種についてであり、水島義郎氏に注目した研究はなされてはいない。

新潟県のチューリップの歴史に言及した文献の多くに水島義郎氏の活動は紹介されている。多くの文献に「新潟県で初めてチューリップを咲かせた人物」と紹介されているにも関わらず水島義郎氏が今まで注目されなかったのはなぜなのだろうか。

調査の最後に新たな疑問が生まれた。

4 第2班の活動内容

4.1 ほうき作り

4.1.1 ほうき作りに至るまでの経緯

第2班は6月の初めに班内会議を行い、年間活動計画の1つとして「コンテナアート*」の作成を7月～8月に行う計画を立てた。しかし、7月4日に神谷で区長さんとヒアリング調査を行った際、

- ①コンテナが非常に錆ついている。
- ②コンテナを道路から見える場所へ移動する必要があるが、移動には業者を頼む必要がある。
- ③コンテナが大きすぎるため、移動しても置く場所が無い。

という3つの問題点を指摘され、コンテナアートを実現するのは厳しいと言われた。そこでコンテナアート案は廃案とし、代替案として「パネルアート」を考えた。しかしこちらの案も、予算が足りない、業者に依頼しないといけない等の問題点があることがわかり、来年度に再検討することになった。

その後、「神谷の子供たちに参加してもらい、ゼミのサブテーマである”神谷の魅力を知り、伝え、つなげる”」をコンセプトにイベントを企画することにし、各自がアイデアを出し合うことにした。出されたアイデアは、以下の八つである。

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none">① 折り紙大会② チューリップの絵大賞（お絵かき）③ 神谷にちなんだ紙芝居④ 神谷遊園地に新しい遊具設置⑤ イルミネーションをプロデュース⑥ ほうき作り |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

どのアイデアも子供たちが参加でき、実現可能なものであった。

以前の訪問で、「ほうき作り」が神谷の伝統工芸になりつつある事を知った私達は、神谷の伝統工芸や歴史を子供たちに肌で感じて貰いたいと考え、「ほうき作り教室」を企画する事にした。

この取り組みを実施するにあたり、ほうき作りに詳しい「神谷創作趣味の会」の永井久一さんに協力を依頼することにした。

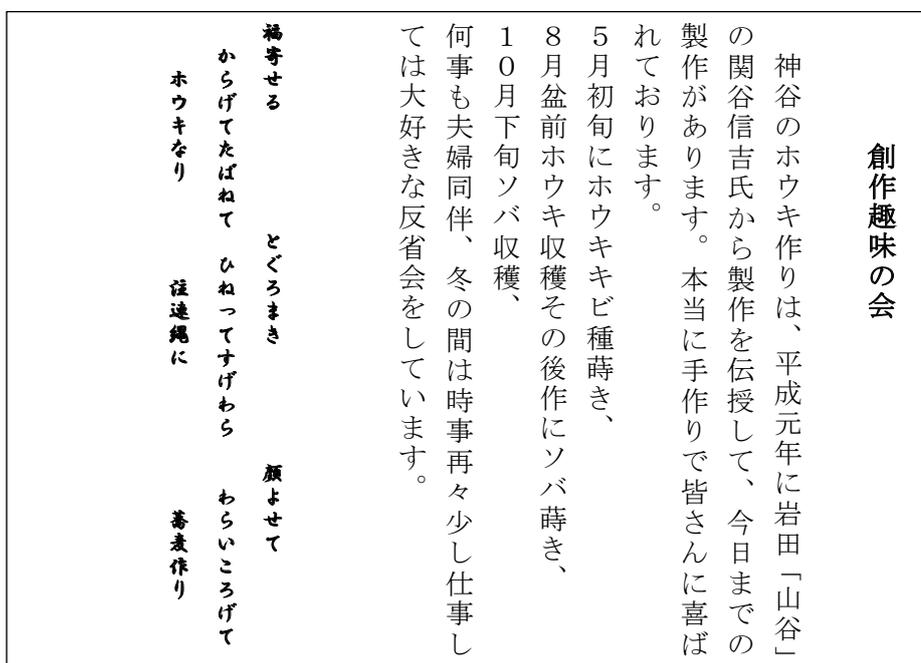
* 横12m×縦2.5mの大きなコンテナに、神谷地域の風景や人柄などの魅力を描き、外部の方に神谷地域の魅力を知って頂くことを目的とした活動。

4. 1. 2 神谷創作趣味の会とほうき作りについて

(1) 神谷創作趣味の会

神谷創作趣味の会は平成10年に発足し、仕事を引退した神谷在住の方々がメンバーとなって、ホウキキビを中心に、ソバ、サツマイモ、カボチャなどを栽培されるとともに、その獲れた農作物を使ってさまざまな作るといふ、趣味の活動を行っている団体である。この会結成のきっかけとなったのが、「ほうき作り」であった。農業を営んでいた永井久一さんが、妻の信子さんの実家のある集落でほうき作り名人として知られていた関谷信吉さんからその作り方を学んだのが始まりとされている。

名人の関谷さんは、ほうき作りを広く伝承したいと考えており、永井さんもその志に賛同され、自らが技術指南役となり仲間と共に活動を行っておられる。



図表4-1-1

永井さん率いる「創作趣味の会」概要

(2) ほうき作りとは

創作趣味の会が行っているほうき作りは、全ての作業を手作業で行っているため非常に技術のいるものである。材料は、自分たちが神谷地区で栽培しているホウキキビを乾燥させたものを使用する。また、作業過程では、糸を強く編みこんだり、針金を巻きつけたりするため、糸や針金を固定する台を使うが、この台は驚くことに手作りであった。これひとつをとってみても、神谷地区の方々の活動への情熱を十分に感じることができる。



図表 4-1-2

ホウキキビの束（左）と作成予定の箒（中）



図表 4-1-3

永井さん達が自作された台

4. 1. 3 神谷創作趣味の会の永井さんとの打ち合わせ

永井さんに、神谷地区の子供たちを対象としたほうき作り教室への協力を依頼したところ興味を持って頂き、10月16日に神谷公民館において打ち合わせを行うこととなった。

まず私たちの企画を説明し、なぜほうき作り教室を開くのか、開催の趣旨を説明した。その結果、人数が集まったら喜んで引き受けてくださることを約束していただいた。

さらに、今回の説明会を通して、ほうき作り教室を開くにあたって心配していた次の疑問点も解消することが出来た。

- ①子供でも作ることができるか。
- ②使用する材料のリストアップと仕入れ方法。
- ③いつ、どこで開くのか。



- ①簡略化したものなら子供でも簡単に自分だけの箒を作られる。
- ②ホウキキビや図表 4-2-2 の台など、箒作成に必要なものは、すべて永井さんが準備してくださることとなった。
- ③会場は、以前ほうき作りの取材を受けた時に使った神谷公民館の2階を貸して頂けることになり、時期は収穫祭と重ならないようにする。

さらに、永井さんから、神谷創作趣味の会の活動概要を詳しく教えていただき、“箒づくり”の他にも“蕎麦作り”も同時に行っている事を知った。開催当日は、ほうき作り教室と同時に昼食に手打ち蕎麦を振る舞ってくださることとなった。

この日は、お話だけではなく、子供でも簡単に作れる箒の作り方を実際に見せていただくことができた。

以下は、私たちが神谷の子供たちに向けて企画する「ほうき作り」で作成予定の箒の作り方である。

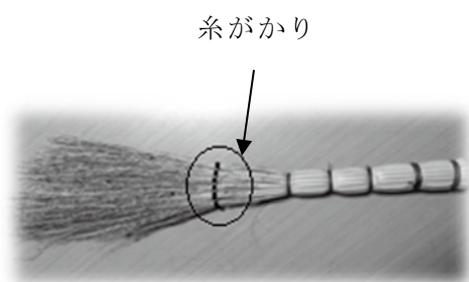
手順 1
前頁の図表 4-1-5 のように長い準備並べ、長さが揃わないよう 30 本ほど束ねる



手順 2
前頁の図表 4-1-6 にある台を使用し、紐で跡をつける。そこを針金で固定し、束がバラけないようにする



手順 3
最後に糸で糸がかり※を作り、手順 2 で行なった針金のところに自分の好きなように装飾を施したら完成である
※糸がかりとは穂先が広がらないように糸で固定することである。図表 4-1-4 参照



図表 4-1-4
子供向けに簡略化された箒の完成品



図表 4-1-5
永井さんへのヒアリングを行っている



図表 4-1-6
実際に箒を作っている様子

4. 1. 4 ほうき作り教室スケジュール決定と参加者募集活動

(1) ほうき作り教室のスケジュール決定

ほうき作り教室を開催するにあたって募集をかけるため、まず始めにスケジュールを決めた。10月16日に行なった打ち合わせを基にして、第2班のメンバーで話し合いを行った結果、永井さんや子供たちの都合を考え、以下のスケジュールで開催することにした。

～ほうき作り教室スケジュール～

場所：神谷公民館

日時：11月4日 or 11日のどちらか 午前10時～午後3時程度

内容：ほうき作り体験と手打ちそば

しかし、この取り組み内容で、子供たちがこのイベントに興味を示してくれるかどうかを今一度検討してみたほうがよいとの指摘を高橋先生から受け、子供たちが興味を示すイベントにするには何を付け加えたらよいか見直すことにした。高橋先生から、手打ち蕎麦にちなんで、子供たちと一緒にそば粉を使ったデザート作りをすることを付け加えたらどうかとアドバイスをいただき、そば粉を使ったデザートを考えることとなった。

(2) デザート作り

さっそくデザートを何にするか話し合ったが、メンバーの多くがそば粉を使ったデザートを知らず、すぐには意見が出なかった。インターネットや料理本で調べ、以下のメニューを候補に挙げた。

①そば粉クレープ

②そば粉白玉

③そば粉クッキー

どれも子供たちが喜んでくれるだろうと思われるものばかりで、どれを作ろうか悩んだが、食べてみなければ始まらないということで、まずは、クレープを試作してみることにすることにした。

(2-1) クレープ

レシピを調べて必要な物をピックアップし、メンバーの講義の空き時間を使って、買い出しと調理を行った。

生地は小麦粉を一切使わず、そば粉に卵などを加えただけの純粋なそば粉クレープを目指したが、それが失敗に繋がってしまった。そば粉の特徴として、小麦粉に比べて塩気が強く、色も茶色っぽくなる特徴があり、生地の色が顕著に出るクレープは合わなかった。

生クリームや果物を加えるなどの工夫を重ねたが、生地の味が邪魔をして、大人受けは良いが、子供には合わないだろうという意見で一致し、クレープは廃案となった。



図表 4-1-7

クレープの生地を焼いている様子



図表 4-1-8

完成したクレープ

(2-2) クッキーと白玉

次に考えたのは、クッキーと白玉である。

まずは白玉についてだが、クレープと同様にそば粉の味と色が合わず、あまり美味しい物が出来あがらなかった。さらに練りものということで、蕎麦と同じ触感になるのではないかということがあり、早々にこちらも廃案とした。

次にクッキーを試作してみることにした。クッキーは子供に人気で、作りやすく、良いと思ったのだが、思いのほか難しかった。初めはレシピ通りに生地を作っても固まらず、とても丸めることが出来なかった。しかし、何度か試作・改良を重ねることで、きちんとしたクッキーを作れるようになった。市販の型を使用することで子供たちに喜んで貰えるデザインにすることができ、味も前述した2つより子供向けに仕上げる事が出来た。お土産として持って帰ることもできることから、そば粉クッキーを作ることとなり、当日の内容が決定した。



図表 4-1-9

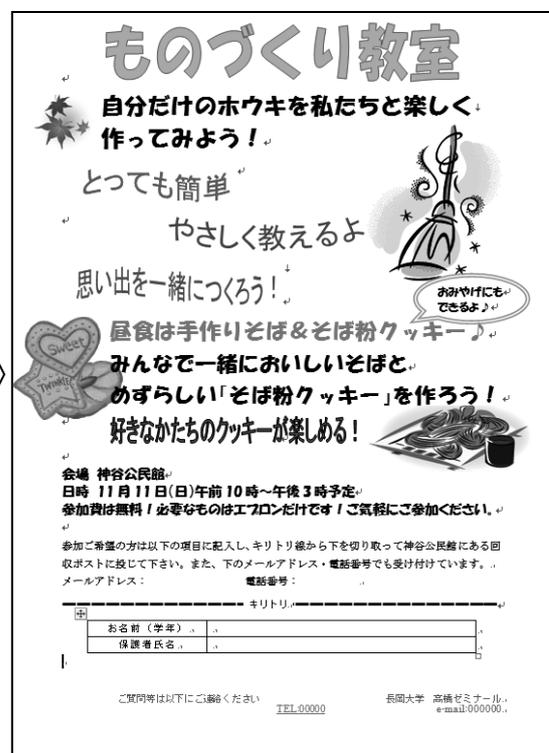
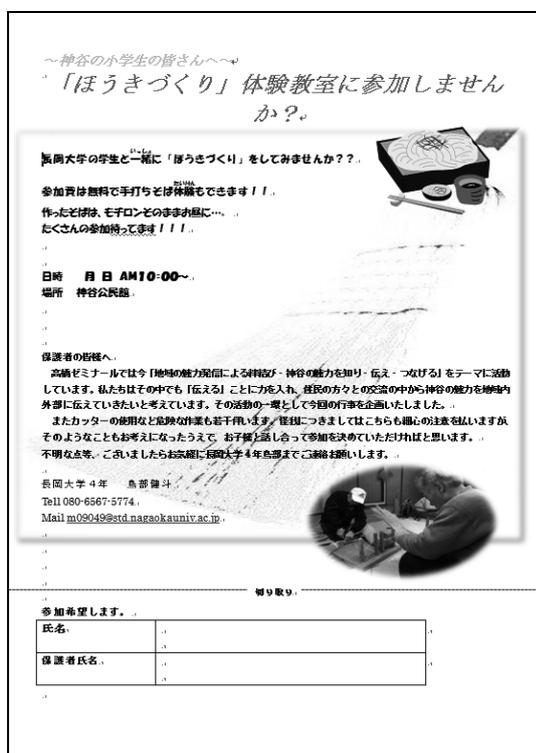
そば粉クッキー試作品

(3) チラシ作り

スケジュールが決定したことで、いよいよ神谷の子供たちに募集をかけることにした。ほうき作り参加者募集のチラシを作り、2週間に1回ある回覧版で各ご家庭に配布させていただき、参加申込用紙は、神谷公民館に設置した回収ポストで回収する方法をとることにした。

そのためのチラシを作ったのだが、回覧版の締め切りが間近だったこともあり、デザインについてあまり考えることができなかった。その結果、回覧版でチラシを回してはみたものの、参加者を一人も集めることが出来なかった。

私たちはもう一度デザインを練り直し、改良したチラシを作り、誠意を伝えるために小学生がいる各ご家庭を直接伺って配ると共にほうき作り教室の説明をし、魅力を伝える努力をした。その結果、小学生2人の参加者を集めることが出来た。



図表 4-1-10

「ほうき作り」参加者募集チラシ

(字が細かくて漢字が多く、内容も子供向けでは無かった)

図表 4-1-11

「ものづくり教室」参加者募集チラシ

(イベント名を「ものづくり教室」とし、子供が参加しやすい名前に変え、絵を多く取り入れることによって、少しでも興味を持ってもらえるように工夫した)

4. 1. 5 ものづくり教室

広報活動の甲斐があり、2名ではあるが参加者が集まったことから神谷創作趣味の会の永井さんに連絡を取り、11月11日（日）に神谷公民館においてものづくり教室を開催することにした。当日は、小学生を始め、私たち大学生や神谷創作趣味の会の方々、またそば作りのために来ていただいたお母さん方などで大変にぎやかなイベントとなった。

(1) ほうき作り

午前中はクッキー作りの準備をしている数名の学生とそば作りをして下さるお母さん方を除いて、皆がほうき作りを行った。

子供たちと私たちはほうき作りが初体験だったため、永井さんを始めとする神谷創作趣味の会の方々から教えていただきながら箒を作った。わからないところがあったらすぐに聞くことを心掛けた。そうすることで多くの方とコミュニケーションを取ることができ、時には子供たちに教えながら楽しく作成に取り組むことが出来た。

自分だけの手作り箒を作ることができた時は、達成感や満足感を非常に感じた。願わくは、子供たちにも同様の感情を感じてもらい、これをきっかけにほうき作りに少しでも興味を持ってもらえたらと考えた。そして、この活動が、ほうき作りが長く広く神谷に伝わっていく足掛かりになれたらと思った。



図表 4-1-12

参加者全員がほうきを作っている様子



図表 4-1-13

参加した小学生と交流している様子

(2) 手打ちそば

昼食に手打ちそばを皆でいただいた。蕎麦は、お店で出しても繁盛するのではないかと
思わせるくらいコシがあって、おいしかった。麺つゆや天ぷら、漬物も全部手作りであり、
全てが神谷を感じさせてくれるとても温かい料理だった。終始笑顔で皆が楽しい昼食時間
を過ごせたのではないかと思う。子供たちも大勢で食事を囲うことの喜びと大切さを学ぶ
良い機会になったのではないかと思う。



図表 4-1-14

手打ちそばを囲う様子 1



図表 4-1-15

手打ちそばを囲う様子 2

(3) そば粉クッキー作り

そば粉クッキー作炉を担当した学生は、午前中に生地準備と参加者の方々の分のクッ
キーを焼き、ラッピングを行った。午後からは、子供たちと一緒に色々な形のクッキーを
作りながら交流を深めた。何度も試作品を作り、改良を重ねた甲斐あって、始めて食べる
そば粉クッキーも子供たちや大人の方々に喜んで貰うことが出来た。お土産でそば粉クッ
キーをあげた時の笑顔とお礼の言葉は今でも頭に残っており、忘れられない思い出となっ
た。



図表 4-1-16

そば粉クッキーの準備をしている様子



図表 4-1-17

子供たちと一緒にそば粉クッキーを焼い
ている様子

4. 1. 6 成果と反省

今回のものづくり教室の成果として、次の点を挙げるができる。

- ①ほうき作りの認知度を高めることができた。
- ②神谷地区の方々との交流を深めることができた。
- ③今後のゼミナールの活動への足掛かりができた。

今回の活動のチラシでの呼びかけや子供たちの参加によって、神谷の伝統工芸になりつつあるほうき作りを、今まで知らなかった方に知っていただく良い機会になったと考える。子供のいるお宅に伺った際、箒づくりを初めて知ったという方が多かったことから、このことは言える。今後、年に2回ほど開催するなど、定期的にほうき作り教室を行うことによって、将来的に神谷の伝統工芸のひとつとして受け継いでゆくことができるのではないかと考える。そのためには、高橋ゼミも継続して取り組んでゆく必要がある。来年以降の高橋ゼミナールのメンバーも神谷創作趣味の会の方々と手を取り合い、協力しながら行なって欲しいと考える。このことは、今後のゼミナールの活動への足掛かりとなるのではないかと考える。

永井さんを始めとする神谷地区の多くの方々との交流を深めることができた。この繋がりは、今後のゼミナールの活動にきっと役立つものと確信する。

反省点としては、計画の甘さが挙げられる。チラシ作りやデザート作りなど、早くから計画的に取り組むことにより、もっと良く出来たと思われるものは沢山ある。もっと早くから計画的に取り組んでいれば、時間に余裕を持つことができ、より満足度の高いイベントが開けたはずである。スケジュール管理をきちんと行うことを今後の課題とし、来年度は、もっと早くから計画的に取り組むようにしたい。

反省点すべき点も数多くあったが、立場の違う多くの方と一緒にひとつのイベントを行い、沢山の笑顔を見ることができた。このことから、本活動は成功だったと確信している。

4. 2 チューリップ植栽

4. 2. 1 チューリップ植栽に至るまでの経緯

第2班の今年度の活動の最後は、神谷にチューリップの球根を植栽する事であった。昨年度作成した神谷情報マップにも載せたように、神谷は”新潟県チューリップ発祥の地”である。この史実を神谷の住民の中にもご存知でない方がいることから、この事実を現実のものとして神谷に残そうと考えた。神谷内外の多くの方が開花したチューリップを目にし、地域の魅力を再発見してもらいたいと考えた。そのためにチューリップの球根植栽を神谷の住民と協力しながら行い、最後に、チューリップ発祥の地を紹介する看板を作成するところまでを年内に実行することを考えた。

チューリップの植栽については5月下旬から話し合いをし、計画を練っていた。しかし実際に活動を始めたのは10月下旬頃からとなってしまった。その間、第2班は、8月の秋季大祭での出し物を計画する事と11月の箒作り教室のための準備を行うことが役割となっていた。第2班は全員で7人だが、8月の秋季大祭が終わっても各自の役割が具体的

に決まっておらず、流されるように月日が経って行ってしまった。10月になり、その後の活動は「ほうき作り教室」と「チューリップの植栽」だけとなったとき、第2班の中をさらに「箒作り班」と「チューリップ班」に班分けする必要性を感じた。班分けを行ったのは10月下旬である。

チューリップ植栽班（3人）は、まずチューリップの性質について以下の項目について調査した。

- ① 植える時期について
- ② 球根はどのようなものがあるか
- ③ 土の性質について
- ④ 道具は何が必要か
- ⑤ 水やりは必要か
- ⑥ 植え方について



- ① 10月から12月。
- ② ホームセンターやインターネット上で調べたところ、新潟県産の球根は1つ150円以上し、原産国オランダ等の輸入球根は1つ25円～50円程度と価格はさまざま。大きさも小さいものから大きいものまである。
- ③ チューリップの球根は弱酸性を好み、庭植えの場合腐葉土や赤玉土等を混ぜ、程よく堆肥や肥料も入れる必要がある。
- ④ スコップ、平鍬、じょうろ、移植ごて。
- ⑤ 球根植栽後は水やりが必要。冬期間は必要なし。
- ⑥ 庭植えの場合、土に10cm程度穴をあけて、球根は尖った方を上にむけて穴に入れる。その上に軽く土をかぶせる。球根同士の間隔は5～10cm空ける。

球根を植栽する時期が今の時期であることを知り、あと2か月しか無いことに焦りを感じた。雪が降る12月までには何とか植栽を終わらせたいと考え、10月30日に神谷へ行き、現地調査と白井区長さんとの打ち合わせを行った。

打ち合わせは、考えてきたアイデアを区長さんに聞いてもらう形となった。まずは植える場所について、神谷遊園地の一角にチューリップ畑を作ることと、旧神谷信用組合の周りをチューリップのプランターで囲みたいという事を提案した。また、植栽にかかる資金は大学からは出ないため、神谷のほうで工面して頂けないか頼んだ。

区長さんは快く私達の相談にのってくださり、神谷遊園地の一角にチューリップ畑を作って植えることを許してくださった。ただし、神谷遊園地は2013年以降、売地になる可能性があると言われた。神谷遊園地は大通りの道沿いで、多くの人が目にする場所であるため、どうしてもここに植えたいという考えを再度伝えた。その結果、神谷遊園地が売地になって、花壇を移動せざるを得ない場合に備え、手軽に土と球根を運べるように土を盛った花壇にすることになった。数日後、区長さんから、神谷遊園地に山土をトラック

で運んできて頂いた。また資金面も、後日必要額（約5万円）の見積もりを提示したところ、準備して頂ける事になった。

～見積りの概要（購入後）～

- ① 花壇植えのチューリップ球根（単色タイプ）、1袋25個入り@498×3袋=1,494円×5色分=7,470円。
- ② プランター植えのチューリップ球根（混色タイプ）、1袋25個入り@598×25袋=14,950円
- ③ プランター培養土30L、@698×12袋=8,376円
- ④ プランター、@198×25個=4,950円
- ⑤ 赤玉土14L、@298×2袋=596円

合計 36,342円

区長さんからは4万5千円を頂く事になったが、上記の見積金額との差額は、チューリップの看板製作に使うことになった。また、この他にチューリップ花壇作りの際、コンクリートブロックが60個必要となったが、その資金は神谷の住民からの援助でまかされた。

4. 2. 2 花壇作り

11月4日（日）、神谷遊園地で花壇作りを行った。当日は区長さんも参加され、運んできた山土の塊を崩す作業から始めた。また、頂いた資金でプランターやプランター培養土等を購入するために、ホームセンターへ買い出しに行った。花壇作りを始めると、遊園地で遊んでいた小学生3人が、私達の活動に興味を持った様子で寄ってきた。彼らが一緒にやりましたようにしていたため、手伝ってもらった事にした。小学生は私達ゼミ生よりも仕事が丁寧で、正直驚かされた。できあがった花壇は直径約3m、高さ70cm程度で、土を階段のように3段に盛りあげた。最後に園芸用の柵で土の周りを囲い、崩れないようにして作業を終えた。



図表 4-2-1
盛り上げた花壇の土



図表 4-2-2
神谷の小学生も参加された花壇作り

数日後、改めて、花壇の様子を見に神谷に行った。しかし、そこには以前完成させた3段花壇の姿はなく、無残にも崩壊していた。3段花壇は連日にわたる雨に耐えられず、柵の下から土が流れ出て、崩れ去ってしまっていた。

私達は11月11日、神谷で「箸づくり教室」を行った後、雨でも崩壊しない花壇を作り直すことにした。当初計画していた3段花壇は諦めることにし、1段だけのシンプルな花壇にすることになった。また、雨によって土が柵の下から流出するのを防ぐため、柵は使わずにコンクリートブロックを2つ重ねて花壇の周りを囲むことにした。

4. 2. 3 球根植栽

チューリップの球根植栽するにあたり、神谷の方にも参加してもらいたいと考え、A3サイズのポスターを作成し、神谷公民館とはじめとして、神谷地域内に数か所貼らせていただいた。

チューリップ球根植栽に参加しませんか？

神谷のみならず、新潟県でここ神谷がチューリップの発祥地であることはご存知でしたか？
すでにご存知の方もいると思いますが、私達長岡大生はその魅力を神谷の皆様、そして外部から来られる方々に少しでも知って頂きたい、今年最後の活動として神谷遊園地にチューリップの花壇をつくります。私達と共にチューリップの球根を植栽し、来年の春には見事咲かせてみませんか？ 当日参加大歓迎です！

球根植栽予定日

<日時>
2012年11月11日(日) 午後3時より開始予定
※雨天の場合、延期。(11月18日(日)または25日(日))

<集合場所>
神谷遊園地

<内容>

① 3段のチューリップ花壇(直径約3メートル、高さ約1メートル)に球根5色を各色75個ずつ植える。

※球根と球根の間は5~10センチほど間隔を空けて、植える深さは球根3つ分(10センチ程度)。

② プランター植栽(プランター数25)
プランターに培養土を入れ、1プランターあたり25個の球根を植栽します。
※冬期間はコンテナの下で保管し、春になったら神谷信用組合の周りと公民館前に出します。

各自持ち物等

- ・軍手
- ・手シャベル
- ・長靴

※多少の雨なら行きます。防寒、防水の準備をお願いします。

<連絡先> 長岡大学高橋ゼミ 南雲 (Tel. 080-5001-1039)まで

図表 4-2-3 チューリップ植栽ポスター

しかし、植栽に参加してくださる神谷の住民は残念ながらおられなかった。この日は、

ゼミ生のみでプランター植えを行った。すでに述べたように、花壇の方は修復を行わなければならない状況だったため、植栽日を延期せざるを得なかった。



図表 4-2-4
プランターに植栽する様子

花壇への植栽は、11月20日のゼミの時間を使って行なった。当日は雨天だったため、花壇の土のコンディションは良くなかった。そのため、理想な球根の植え方はできず、春になって、375個の球根すべてが開花するか心配になった。

植栽には、神谷の小学生2人も参加された。



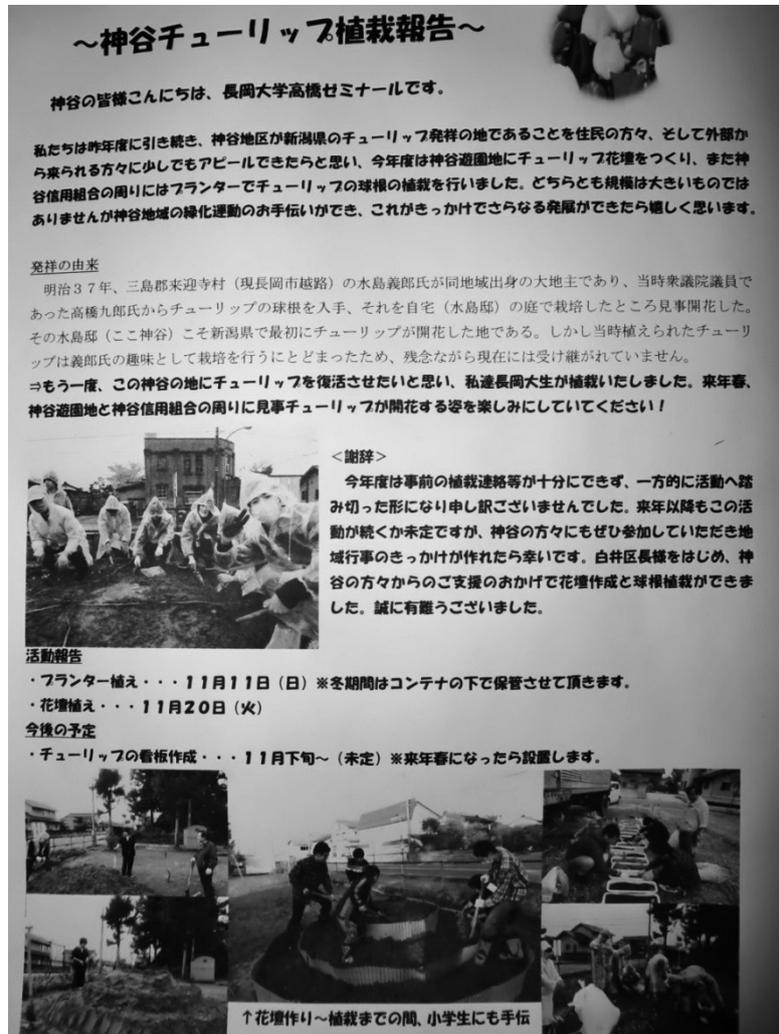
図表 4-2-5
5色の球根をそれぞれの場所に植える



図表 4-2-6
植栽に参加する神谷の小学生

チューリップの植栽を行ったことをいち早く神谷の方々に知らせたいと考え、「神谷チューリップ植栽報告」というチラシを作り、回覧板に載せてもらえないか、区長さんをお願いした。植栽した週は回覧板を回したばかりで、次回回覧板に載せてもらった。回覧板にはチューリップ発祥の由来、高橋ゼミの活動、まだ植栽についてご存知ではなかった方への謝辞、今後はチューリップの看板作りを行うといった事を載せた。

チラシは、一部だけ印刷して区長さんに渡したが、本来なら回覧版の数の分（16枚）だけ用意しなければいけないことを知った。さらに、回覧板は一日に一軒回るのが精一杯で、一番最後の家に届くのは半月後になることも初めて知った。回覧板が実際に神谷に回り始めたのは12月上旬であったことから、最後に回覧板が届いた家庭は12月中旬になったのではないと思われる。



図表 4 - 2 - 7 回覧板で回した植栽報告書

4. 2. 4 看板作り

チューリップの植栽と併せて、神谷とチューリップとの関わりを紹介する看板の制作を行った。看板を建てる事によって、神谷が新潟県内におけるチューリップ発祥地である事実を、多くの方に目で見て知らせる事ができると考えたからである。

チューリップの植栽が終わった時点で、区長さんから頂いたチューリップ活動の資金は残り約 8,000 円となっていた。8,000 円で作れる看板はどの程度のものになるのか、ホームセンターへ行き、板やペンキ等の価格を調べた。その結果、板は縦 90 cm、横 180 cm、厚さ 1.2mm のものを使うとし、加えてペンキやハケを買っても 8,000 円以内に収められ

る事が分かった。その後ゼミの時間を使い、看板のレイアウトを決めていった。まず、看板のキャッチフレーズは、「チューリップ発祥の地」にすれば分かりやすいのでは？と考えたが、このキャッチフレーズは新潟県で良く使われていることから却下となった。「発祥の地」に代わる良い表現はないかと考え、最終的に「チューリップの里神谷」に決定した。また、チューリップのイラストや看板の背景色も決めた後、看板作りを12月10日より3回にわたって神谷公民館で行なった。

～12月10日～

- ① ベニヤ板、角材、背景色ペンキ、ハケ、マスキングテープ等買い出し。
- ② ベニヤ板の補強作業。(角材を板の裏側に打ち付け)
- ③ キャッチフレーズ「チューリップの里神谷」とチューリップのイラストをカーボン紙で板に複写し、そこにマスキングテープを貼る。
- ④ ペイントローラーで背景色(ブラウン)を塗り、マスキングテープを剥がす。

～12月17日～

- ① 「チューリップの里神谷」の文字輪郭を彫刻刀で彫る。
- ② ペンキで文字とチューリップのイラストを塗る

～12月24日～

- ① 「～発祥の由来～」の一文をカーボン紙で複写
- ② カーボン紙で板に写った文字を白いマーカーでなぞる。(完成)

2013年1月1日、私達が製作したチューリップの看板は、“賀詞交換会”で神谷の方々に公開された。看板は建てるための加工を施した後、2013年の春に神谷遊園地のチューリップ花壇の近くに建てられることになる。また、看板はチューリップが開花する4月～5月だけではなく、年間を通して設置される予定であり、神谷とチューリップとの関わりを広めることが期待できる。



図表4-2-8 チューリップ看板作りの様子

4. 2. 5 第2班の活動を振り返って

第2班は“神谷の魅力を引き出す”という事で、秋季大祭の「演芸大会」への参加、「箒づくり教室」企画・実行、「チューリップ植栽と看板作り」の3本立てで活動してきた。

活動を振り返ってみてあがった反省点は、第一に、秋季大祭のときの出し物である「よさこいソーラン」が練習不足で大失敗してしまった事である。失敗した理由としては、出し物を計画するのが遅すぎた事や、夏休みに入り、全員が集まって練習する時間が殆ど取れなかったことが挙げられる。もっと早く計画を立て、練習する時間を多く設けたならば、恥ずかしくない踊りを見せられたのではないかと考える。

二つ目は、「箒づくり」と「チューリップ植栽」のどちらも、神谷の人たちに対する報告や提案といった活動が遅かったことである。回覧板での活動連絡や、ポスターによる呼びかけが実施1週間前だった事もある。多くの方から参加していただくには、最低でも1か月前から呼びかけをする位でないと間に合わないことを実感した。また、一軒一軒訪問して参加の呼びかけをすることもあったが、多くの方が参加される神谷の行事の時に呼びかけるのが、一番良い方法だと思った。

各活動を終了後のアンケート調査を行う事をしなかったために、神谷の人たちが私達の活動をどう捉えているのか把握できずに終わってしまった。今後は、取り組みの後には必ずアンケート調査を実施し、地域に対する認識が深まったかどうか、私達が目標としてきた“絆結び”に繋がったか等、調査する必要があると感じた。

神谷に何度も訪問し、区長さんや永井さん等から様々な話を伺ったり、活動の計画を立てるための打ち合わせを行ったりしてきたが、毎回嫌な顔ひとつせず快く相談に乗ってくださった。そんな区長さん、永井さんには大変感謝し、私達からも何か恩返しをしなければならぬと考えている。



図表4-2-9

行事の場を借り、ヒアリングをしているところ

5 第3班の活動内容

5. 1 冊子作り、その他

5. 1. 1 冊子作りの目的・概要

(1) 冊子の目的・・・神谷の魅力を「伝える」

平成24年度の活動のテーマは、「神谷の魅力発信による絆結び—神谷の魅力を知り・伝え・つなげる—」であるが、その中で第3班は神谷地区の魅力を多くの人に「伝える」ことを目的として活動してきた。

具体的な活動にとりして、神谷の魅力を多くの人に発信するにはどのような手段が適しているか考え、冊子作りという方法を選んだ。

(2) なぜ冊子なのか？

情報発信の手段として、冊子作りを選んだ理由は、以下の3つである。

① 神谷の方々の希望に応えるため

昨年度（平成23年度）の活動で作成した神谷マップの評判がよく、マップ発行後に行ったアンケート調査でも、「神谷についてもっと詳しく知りたい」、「神谷マップの次号が欲しい」等々の意見が多く寄せられた。これらの要望に応えるために、神谷マップでは載せきれなかった情報の補足と拡充を目的として、冊子を発行することにした。

② 冊子の掲載情報の多さとその配布の際の利便性から

冊子にすることで昨年度のマップに比べ情報を多く載せることができること。そして道駅などに置くことで、多くの人に見てもらえることができること。また、冊子を読んでもくださった人からまた別の人の手へと渡り、回覧されることで神谷地区の方々や長岡に住む方々に、より多くの神谷の魅力や歴史を伝えることができると考えた。

③ 昨年度のマップ作りの実績とノウハウを活かせること

昨年度の活動におけるマップ作りで蓄積した知識や経験を冊子作りに活かせるため、効率的な活動を行うことができること。また、それらの知識・ノウハウを今年度の3年生に伝えることで、今後の高橋ゼミナールの活動に継続できると考えた。

5. 1. 2 冊子作りの経緯

発案当初の冊子作り計画から完成に至るまで

平成24年度の6月の時点で冊子の作成を決めていたが、掲載内容は未定であった。その後、掲載内容についてのグループ内討議と他のグループとの話し合いを行なった。

↓

7月から8月

冊子の目的の確認、掲載内容の討議、活動計画の策定と費用の検討。

↓

10月上旬

掲載内容の候補として、「高橋九郎氏」、「水島義郎氏」、「チューリップ植栽」、「秋季大祭への参加」、「ホウキ作り」、「ネット地図」、「神谷の伝統芸能」に絞り込んだ。

↓

10月16日

各班によるゼミナール内の報告会での意見を踏まえて、いくつかの記載内容について再検討を行った。また、冊子の内容が、高橋ゼミナールの活動報告書のような印象を持つものになっているため見直した方が良いという意見を受け、内容の見直しを行った。

↓

11月

冊子の第一企画書の提出。指摘を受けたいくつかの改善点や問題点の修正。

↓

12月

第一企画書を改善した第二企画書を作成・提出

↓

1月

ゼミメンバーに依頼した冊子内容の担当部分の回収と編集

5. 1. 3 冊子企画案

(1) 第一案

フォント：MS Pゴシック

フォントサイズ

通常：10, 5 p t

小見出し：14 p t

大見出し：16 p t

用紙サイズ：A4

字数：40字×40字

構成

～タイトル

～目次

1. はじめに
 - ・小冊子の趣旨
 - ・神谷の概要
 2. 神谷について
 - ・高橋九郎氏
 - ・神谷とお酒の関係
 3. チューリップ特集
 - ・水島義郎
 - ・チューリップ植栽
 4. 行事
 - ・どろんこ田植え
 - ・収穫祭
 - ・秋季大祭
 - ・ホウキ作り
 - ・行事一覧
 5. ネット地図
 - ・システム
 - ・コミュニケーションツール
- 参考文献

(2) 第二案（改善案）

- ・第一案からの改善と変更を行い、冊子もこの内容で作成することを決定。

—改善点

- フォントサイズの変更（以前に比べて大きくした）
- 冊子のサイズをA4からB5へ縮小
- 内容の重複部分の改善と見直し
- 冊子の読者ターゲットの再確認
- タイトル修正
- 項目5の変更
- 冊子の締め括りとなる「まとめ」の導入

・改善後の内容

- フォント：MS Pゴシック
- フォントサイズ
 - 通常：12 p t
 - 小見出し：16 p t
 - 大見出し：18 p t
- 用紙サイズ：B5

文字数：30 字×30 字

文章は「です、ます」で統一

読む人に神谷の魅力が伝えられるような内容にする

構成

タイトル：神谷の魅力との出会い～神谷の魅力を知り・伝え・つなげる

目次

1. はじめに
2. 神谷ってどんなところ
 - ・高橋九郎氏
 - ・神谷地域の住民の方々
3. 特集 チューリップ秘話～新潟県初の試験栽培の地 神谷
 - ・水島義郎氏
 - ・高橋ゼミのチューリップ植栽活動
4. 行ってみました神谷地区
 - ・どろんこ田～田植えから収穫祭まで
 - ・神谷秋季大祭
 - ・ホウキプロジェクト
 - ・神谷地区行事一覧
 - ・神友館 命名決定
5. e コミュニティプラットフォームで神谷をご紹介
 - ・システム
6. あとがき
 - ・まとめ

5. 1. 4 冊子の各項目について

(1) なぜこの項目になったか

冊子の項目をこのように設定した理由は、まず何よりも、この冊子を読む人に神谷の魅力を伝えることを念頭に置いて設定した。そのため、内容も神谷地区とはどのような所かということから始まり、神谷の魅力的な歴史や行事について記載した。

(2) 各項目の説明

1. はじめに

「はじめに」では当冊子の趣旨について簡単に説明する。

2. 神谷ってどんなところ？

ここでは「神谷の偉人 高橋九郎氏」と「今の神谷のすごい所」の 2 つの項目で構成されている。「神谷の偉人 高橋九郎氏」では、神谷の大地主であり衆議院議員でもあった高橋九郎氏の神谷信用組合の設立時の貢献や暗渠排水工事等での功績について触れ、神谷地区への貢献が現在の神谷とどのように関係しているのかを説明する。

「今の神谷のすごいところ」では、今の神谷地区の方々と交流を持つなかで“すごい”と感じたこと、私たちの視点から見てここは神谷の魅力だと思えたことについて記載し、この記事を読んだ方には神谷について興味を持っていただくことを目指した。また、これを読んだ神谷の方々にも自分達の魅力を再確認して頂けたらと考えている。

3. 特集 チューリップ秘話

「水島義郎氏の功績」と「高橋ゼミナールのチューリップ植栽活動」の2項目で構成した。「水島義郎氏の功績」では、今や県花となった新潟県のチューリップは、実は神谷の地で、水島義郎氏によって初めて開花したという知られざる神谷の歴史について記す。そして「高橋ゼミナールのチューリップ植栽活動」の項では、その史実をアピールするために平成24年度に高橋ゼミナールが行った神谷地区でのチューリップ植栽と看板作りについて記述する。

4. 行ってみました神谷地区

高橋ゼミナールが神谷の行事やイベントに参加した際の感想や、その時の楽しかった思い出などを「どろんこ田～田植えから収穫祭まで」、「秋季大祭」、「ホウキプロジェクト」で述べる。また、「神谷地区 行事一覧」を載せることで、外部の方がこの冊子を読み、実際に神谷の地を訪れたり、行事を見物したりできるようにする。また、神谷地区の出来事として、旧神谷信用組合の名前が「神友館」に改められたことを告知する「神友館 命名決定」の5つの項目で構成することにした。

5. e コミュニティプラットフォームで神谷をご紹介

現在、検討を進めている“e コミュニティプラットフォーム”を用いたインターネット上での神谷地区の紹介と情報発信について、「システム」の項で説明する。また、URLを記載し興味のある方がインターネット上で検索できるようにする。

6. あとがき

「まとめ」でこの冊子の締め括りとなる文章と謝辞、参考文献を記述する

5. 1. 5 冊子の完成

現在、冊子は編集段階にあり、まだ完成していない。今年の2月中の完成を目指して、作業を進めている。今検討中の“e コミュニケーションプラットフォーム”での公開も考えており、今後は3年生の手で、来年度の活動や新ゼミ生の参考書として冊子を利用する等、様々な場面で役立てて行きたいと考えている。

5. 1. 6 冊子の配布

今年度作成する冊子の部数は未定であるが、少数発行で行うつもりである。そのため配布先は主に神谷地区とする。神谷地区の回覧板を使って回覧するための冊子17部と神谷地区の公民館に置かせて頂くための10部程度、そしてゼミナール内で利用するための1

2部の計39部の印刷を検討している。データを3年生に引き継いでおくことにより、来年度に改めて予算等を検討し、内容の再検討などを行ったうえで現3年生の企画のもとで活用して行くことも考えている。

5. 1. 7 他の活動への参加、取材

第3藩は、他のグループの活動に積極的に参加した。その理由は、各班の活動の進捗状況を把握し、冊子に掲載するためである。しかし、それ以上に大きな理由は、自身も参加することにより、活動への理解を深め、冊子の内容にまとめる上で最善の形で内容編集を行い、読者にわかりやすい内容にするためである。

参加した活動

| | |
|-----------|------------------------------|
| 5月19日 | どろんこ田での田植え 神谷での高橋ゼミナールの活動報告会 |
| 6月10日 | 神谷運動会 |
| 8月25日・26日 | 神谷秋季大祭 |
| 11月4日 | チューリップの花壇造り |
| 11月11日 | ハウキ作り チューリッププランター準備 花壇造り |
| 11月20日 | チューリップの球根植栽 |
| 12月10日 | チューリップの看板造り |
| 12月24日 | チューリップの看板造り（2回目） |

5. 1. 8 活動から学んだこと

冊子の制作を通して学んだことは、神谷地区の魅力は今まで学んできた以上に深く、また神谷の方々から学べることも多いという事実であった。4年生は、昨年度に引き続き神谷での活動を行ってきたわけであるが、神谷の方々との交流を引き続き持ったことで、昨年度は見えなかった新たな魅力が見えてくることもあった。特に、秋季大祭やどろんこ田などでは、見学するだけでなく、実際に参加することで神谷の一員として神谷を見ることができたのではないかと思っている。また、冊子を作る中で、昨年度の活動を通じて見つけた神谷の魅力以外にどんなことを載せればいいのかと悩んだこともあったが、そのような不安は無用だった。神谷という土地の魅力は、1年程度調べたくらいでは調べ尽きることはなく、今年度の活動を通じてより多くの新しい魅力を見つけることができた。新たに気付いた魅力は、今後の活動を通じてより多くの人に伝えてゆくことを考えている。

5. 1. 9 反省点及び今後の改善

活動を行っていく上で発生した最大の問題は、活動の遅れであった。当初の活動予定では、12月には既に小冊子の編集に取り掛かり、1月の完成を目指していた。実祭には、1月に編集し2月に完成する予定となってしまう。この遅れの原因として、次の3つが挙げられる。

① グループ内での意見の不一致

第一に挙げられる理由は、グループ内での意見統一を早期にできなかったことである。活動当初、記載内容を前期のうちに決めておくつもりであったが、意見の対立や、思い違いから、記載内容やページ数、仕事の割り振りを決めることができなかった。後期の10月頃まで具体的な記載内容を決定できなかったことが、その後の作業の遅れを招き、結果として1か月近い作業の遅れが生じてしまった。

② 計画性の甘さ

当初、冊子の内容は、今年度のゼミナールの活動がどうなるかを見た上で決めることにしていた。そのため、当初の計画でも、やや遅めの12月から1月頃の完成としていた。だが、実祭には、活動後期になると仕事も忙しくなり、冊子の内容の検討やその後の計画立案を行う時間が少なくなり、仕事の遅れにつながった。また、同時にeコミュニケーションプラットフォーム企画も同時進行で行ったため、冊子作成との両立が出来ず、またメンバー各人の仕事と責任を明確にできなかったことも、遅れを招いた原因である。

③ 各活動を把握しきれなかった

冊子作りにおいて重要だったのは、各班の活動の現状と今後の計画を把握し、それに対応した冊子の作成計画を練ることであった。しかし、各班に活動報告の要求を出さず、また、活動の現状を把握する努力も怠ったために情報が入ってこなかった。その結果として情報提供を待つ姿勢となってしまうと次の活動への取り組みが遅れてしまい、他のグループからも早く次の行動へ移るように急かされるという結果を招いた。

6. まとめ

6. 1 1年間の活動を通して

一年を通して、各班の中で活動を行ってきた。それぞれが分担された役割をこなし、効率よく活動ができたかと判断する。私たちの活動を通して、神谷地区の方々に変化があったかは定かではないが、私たち自身は、ほとんどの学生が意欲的に取り組んだため、非常に内容の濃い活動ができたと考える

6. 2 活動を行った上での反省

今年度の活動では、成功した部分も多いが、反省すべき点も多くあった。

計画が甘く、事前に準備できなかったために満足ゆく結果を出せなかったことが多々あった。アイデアを出すだけの話合いに終わってしまったために、実行までの工程作りが先延ばしとなってしまう、結果的に予定通りに活動が進めることができなかった。

また、チラシ作りや神谷とのアポイントメントを取ることが、予定がギリギリとなり、先方にも多大なるご迷惑をかけることがしばしばあった。これらは早急に改善すべき点である。そのためにも来年度は、早い段階でスケジュールを立て、より高い意識で活動に取り組む必要がある。また行事への参加が一部の人に偏ってしまったことも反省点として挙げなければならない。私たちの活動の目的は、神谷地区の活性化であるため、そ

の対象者である神谷の方々との交流は非常に重要であると考え。就職活動で忙しい等、様々な理由があるだろうが、ゼミ生全員が行事に参加しようという申し合わせが守られなかったことは、誠に残念である。さらに、参加した人としなかった人で、それぞれ持っている情報に差ができてしまい、スムーズな話し合いが行えなかった原因の一つにもなった。

6. 3 社会人基礎力に関して

「地域活性化プロジェクト」の本来の目的である「社会人基礎力」の向上について、述べる。

向上できたものの第一は、「コミュニケーション能力」である。ある程度年齢が上の目上の方と関わる機会は、アルバイトでもやっていない限り、学生生活の中ではない。ここまで関わりを持つことができたのは、私たちにとって、非常に大きな経験になった。特に、いわゆる「飲コミュニケーション」と言われるお酒の席での付き合いを学ばせて頂いたことは、非常に良い経験となった。これから社会人になると増えてくるであろう「お酒の席での目上の人との付き合い方」について、実践的に学ばせていただくことができた。

具体的になにをどう学ばせて頂いたかを挙げることは難しいが、実際に経験できたことは今後大きなプラスになること間違いなしだと考える。この活動をやっていて良かったなど一番思えることである。

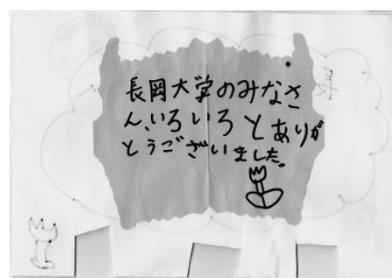
2つ目に「失敗に対する修正能力」の向上が挙げられる。「ほうきづくり教室」を開催する際、時間も限られていたことから、急ごしらえで作った参加者募集のチラシを回覧板で大急ぎで流してもらうことにした。結果は、応募はゼロということになってしまった。そこから私たちは、何がいけなかったのかを話し合い、新たな広告の作成と、小学生がいる家を一軒一軒訪問し、自分たちの言葉で取り組みの主旨を伝え、チラシを配ることにした。その結果、少数ではあったが参加者を得て、無事開催にこぎつけることができた。

このように「失敗の原因は何で、どう改善すればいいのか」を討論して修正点を洗い出し、それにもとづいた改善を施し、その結果、成功を導き出すことができたことは、自分たちの自身につながるるとともに、今後の人生に対する教訓ともなった。

6. 4 感謝のメッセージ

チューリップの植栽を手伝ってくれた小学生から、感謝のメッセージが寄せられた。

「神谷の文化や歴史を新しく神谷に移り住んだ人たちや神谷の子供たちから知ってもらう」ことを目指した私たちの活動が、神谷の子供たちに伝わった証であり、この一年間の活動が報われた気持ちになった。



引用・参考文献

資料

- ・創作趣味の会-文章

書籍

- ・神谷略史 高橋友二郎 1986.7
- ・チュウリップの葉 新潟県農産物検査所 刊行年不明
- ・新潟懸園蓺要鑑 新潟懸農會 1911.10
- ・越後の花 新潟懸花卉球根協會 1930.4
- ・園蓺沿革史 新潟懸之巻島垣素山園 1937
- ・富山チューリップの歩み故水野豊造翁顕影記念 富山県花卉球根農業協同組合 1970.7
- ・チューリップ球根に関する資料 新潟県農業改良課 1975.12
- ・新潟県史通史編8近代3 新潟県 1988
- ・チューリップ栽培誌ノート木村敬助1997.3
- ・チューリップ・鬱金香―歩みと育てた人たち― 木村敬助 2002
- ・小山重小伝我が国チューリップ栽培の先覚者 木村敬助 2008.3
- ・学生による地域活性化プログラム平成23年度活動報告書 長岡大学 2012.3

新聞

- ・中越新報1918.11.17
- ・新潟日報2005.1.7にいがた花語り
- ・新潟日報2005.1.21にいがた花語り
- ・新潟日報2005.4.22にいがた花語り
- ・新潟日報2005.6.10にいがた花語り
- ・新潟日報2005.6.17にいがた花語り
- ・新潟日報2005.6.24にいがた花語り
- ・新潟日報2005.7.1にいがた花語り
- ・新潟日報2005.9.16にいがた花語り
- ・新潟日報2005.10.7にいがた花語り

フリーペーパー

- ・神谷情報マップ 長岡大学高橋ゼミナール3年生 2012.2
- ・文化情報誌「ふうど」2012年春号vol.16 千年の恋 株式会社タカヨシ

論文

- ・新潟県における花卉園芸の歴史 新潟県立植物園 倉重祐二

Webページ

- ・JA全農にいがた <http://www.nt.zennoh.or.jp/>
- ・にいがた観光ナビ <http://www.niigata-kankou.or.jp/>
- ・新潟市 <http://www.city.niigata.lg.jp/akiha/about/kankou/flower/rekishi/senzen.html>
- ・新潟県立植物園にいがた花物語
<http://botanical.greenery-niigata.or.jp/hanamonogatari/ichiran.html>

謝辞

白井区長様には、ヒアリング調査や打ち合わせなどの度に貴重なお時間を割いて頂き、大変ありがとうございました。また、地域アドバイザーとして中間発表会と成果発表会では、貴重なアドバイスを頂きました。ご指摘のとおり、時間が押してから行動が多く、そのたびに白井区長様や活動に関わって頂いた方々に御迷惑をお掛けしたことをこの場を借りましてお詫び申し上げます。

我々が企画したモノ作り教室に協力して下さった永井様とその企画に参加し、ご指導いただいた皆様に御礼申し上げます。

地域アドバイザーとして、中間発表会や成果発表会の席上で、e コミュニティープラットフォームを紹介していただくなど、貴重なアドバイスをいただいたながおか生活情報交流ねっと理事長の桑原真二様、貴重な情報をありがとうございました。

たくさんの資料を紹介して頂き、ヒアリング調査にも協力して下さった新潟県立植物園長倉重祐二様、文献調査に際しお世話になった各自治体の皆様に感謝いたします。

最後になりましたが、神谷 MAP 第2弾作成にあたって、貴重なアドバイスを頂いた皆様に感謝を申し上げます。

おかげ様で、神谷地区の皆様からの多くの助けを受けて、1年にわたる活動を無事に終了することができました。

この一年間の活動を通して、反省するべき点も浮かび上がってきました。この反省点は、来年度の活動の中に活かしてゆきたいと考えています。

この一年間、お世話になった皆様、本当にありがとうございました。